

五、約三心明

一。本文。「向説無染清浄心、安清浄心、楽清浄心。此三種心略一処成就妙楽勝真心。応知」

一。順菩提門の三心。この第三節に於いては、順菩提門に於いて説かれたる三心、即ち無染清浄心、安清浄心、楽清浄心の三心名が、妙楽勝真心と謂われる義を成就して、名義撰対することを示されるのである。

先に、順菩提門に於いて、智慧門によつて無染清浄心を成就し、慈悲門によつて安清浄心を、方便門によつて楽清浄心を成就して、以て菩提に隨順することが説かれた。即ち、己が為に諸の楽を求むる心を染着心と云われ、この心菩提の為に障碍なるが故に、菩薩は智慧によつて、己が為に諸の楽を求めざる無染清浄心を成就する。この心は、よく菩提に順ずるが故に、順菩提門と云われるのであつた。この無染清浄心こそ、次の二種清浄心を成就する根本心である。

次に慈悲門によつて安清浄心が成就せられる。安は安穩で、衆生の苦を抜き、菩提安穩の処に衆生をおかんとする度衆生心を安清浄心と名づけるのである。これ無染清浄心の己の楽を求めざる心を更に一步進めたものである。終に、楽清浄心とは、一切衆生をして、大菩提を得しめんとする心である。菩提は、畢竟常楽の処である。菩提をおいて外に、永遠の常楽はあり得ない。故に、方便門によつて、一切衆生をして大菩提を得しめんとするのである。しかるにかかる菩提は何に依つて得るのであるか。具体的には、大乘門たる安楽仏国土に於て得るのであるが故に、天親論主は「衆生を撰取して彼の国土に生ぜしむるを以ての故に。」と説かれた。楽清浄心とは具体的に自ら安楽仏國に願生しつつ、それを通して、衆生を撰取して彼の國に生ぜしむるより外に道なきことを示されたのであつた。

かくして、隨順菩提門の三心は、要するに真實の自利を全うすることによつて利他を成ずる、菩提心の終始を示されたものであつた。無染清浄心、安清浄心、楽清浄心の一を欠けば、菩提を成就することは出来ない。この三心が順菩提門の三心と云われる所以である。三は遂に三でなくて、三は一でなければならぬ。然らばその一とは何であろうか。これ即ち妙楽勝真心がこれである。

一。略一処。略とは、粗略の義ではなくて、総称のことである。一処とは、所縁の境を指す。經に係念一処というが如くである。

「此三種心、略一処、成就妙楽勝真心」

略一処とは、成就せる菩薩の位を示すものである。全て、未熟なるものは、この略一処の徳を持たざるものである。例せば、自利の智慧は、自己を縁じて成就し、利他の慈悲は、物を縁じて為さんとするが如き、常に二縁以上によつて生きんとするは、略一処の徳を持たざるものである。しかるに成就の機は、樹木の太陽一つを縁じて成長するが如く、略一処の徳を持つのである。

今の三種心の如きも、無染清浄心は自己を縁とし、安清浄心は、他身を縁として成ずるとなすが如きは、略一処の徳なきものである。かく二縁によらんとするは、三種心未熟なるが為である。

しかるに今、略一処とは、三種心が、同じく一仏徳を縁じて成就するが故に、略一処成就と云われるのである。されば、次に、釈して、從愛樂仏功德起と説かれるのである。誠にこの略一処の徳たる必須極要のものである。信仰生活の終始は、一仏徳を縁として成就すべきに、歡喜と云えば歡喜を、信心と云えば信心を、教法を聞信すると云えば善知識を、信樂と云えば弥陀を、禮拜と云えば身業、称名と云えば口業を、各々一一の徳がバラバラに縁を求めて一に統融せざるを、自力と云われる。順境に自らの心を用いてこれに囚われざらんとし、逆境には、唯忍従によつてこれを超えんとし、非難疑謗には、これを自己の労作によつて封じんとし、賞讃には、名利心を以てこれを受け取らんとす、かくの如くにして歩まんとすれば、念仏もついに隨縁の雜善を出でざるべし。八万四千の諸縁、これを廻顧することなく、直ちに本仏を仰ぎ、一切をして略一処に解消せしめて、無碍の道味を体解するに至つて、念仏は、眞の力を顯現し、十八願の一心正念の直道と云われるであらう。かくの如く、菩薩は、今の三種心をも、略一処に一仏徳を縁として成ずるのである。

一。妙樂勝真心。無染清浄心、安清浄心、樂清浄心の三心は、これを義に依つて結成すれば、妙樂勝真心と名づけられる。即ちこの三心の名は、妙樂勝真心の義と、名義撰対するのである。

誠に妙樂勝真心とは、広略相入の仏徳を觀じて成就する心である。仏徳に帰依して巧方便回向を成じ、自他の成仏を自然に成ずる隨順菩提門の心相を妙樂勝真心と名づけられるのである。

一。本文。「樂有三種。一者外樂、謂五識所生樂。二者内樂、謂初禪二禪三禪意識所生樂。三者法樂五角反樂魯角反謂智慧所生樂。此智慧所生樂、從愛仏功德起。」

樂の三種。

一。鸞師は、樂を分別して、外樂、内樂、法樂樂の三種となし、以て、菩薩の妙樂勝真心の何たるかを示さんとせられるのである。

まず、外樂、内樂とは如何なるものなるかを示して、「一には、外樂とは謂く五識所生の樂なり。二には内樂とは、謂く初禪二禪三禪の意識所生の樂なり。」と云われる。以下、初学者の為にやや委曲をつくして述べる。五識即ち、五根、眼、耳、鼻、舌、身が、色声香味触の五境において起こすところの樂を五識所生の樂と云い、これを外樂と云われるのである。即ち感覺を通しての下等なる樂である。次に内樂とは、意識におこる樂であつて、いわゆる、精神的なる樂である。初禪二禪三禪とは、欲界(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・及び天世界中の第六他化自在天までをいう)と、色界と、無色界(心のみあつて、色即ち形なき世界)の三界中、色界をいうのである。禪定によつて得る果報にして、形善美を極めた世界と云われる。この色界に於ける樂を、内樂と

云われるのである。この樂は、禪定（深き精神生活）によつて生ずるいわゆる、色界定心位の樂であつて、外塵（客觀界の五境）によつて生ぜず。故にこれを内樂といふのである。然れども、この内樂は、もと有漏、無漏に通じて云われるものであつて、凡夫外道の所得は有漏、聖者の所得は無漏の法樂、この有漏無漏に通じて内樂と云われるが、今は但有漏のみを取つて内樂となし、以て智慧所生の樂たる法樂樂に揀ばんとするのである。

一。智度論三十一に云く、

「五識相応樂、是名外樂。意識相応樂、是名内樂。麁樂名為外樂。細樂名為内樂。如是等分別内外樂、苦受、不苦不樂受亦如是。」

この智度論の説は、樂受、苦受、不苦不樂受と分別するいわゆる三受門に約して明かされたものである。この三受門に対して、又五受門あり、対照して明かさば、

五受門

三受門

苦受

樂受

憂受

喜受

捨受

苦受

樂受

捨受（不苦不樂受）

身に感受するところの逼迫不適悦を苦受と云い、心にこれがあるのを憂受という。身に感受する適悦を樂受と云い、心にこれがあるを喜受という。故に苦受と樂受は今³現に身に受けつつあるもので、樂受又は喜受は心中にあるものである。捨受（不苦不樂受）とは、身心に於いて感受する逼迫にもあらず、適悦のも非ざるものをいうのである。この五受門も、苦受と憂受を合して苦受、樂受と喜受を合して樂受として、三受門となるのである。

今、三受門に於いて明かされるが故に、外樂を五識所生の樂、即ち欲界の五欲の境に依りて起す樂とし、内樂を、初二三禪の意識の樂、即ち五欲の外塵を縁ぜずして起す樂とせられる。しかるに、五受門に依つて言わば、欲界にも意識の樂がある、喜受と云われるのがそれである。喜受とは、心にある喜びである。又、初禪二禪三禪、色界の樂を内樂と云われたが、しかし、初禪にも前五識の樂ありと説かれる。智度論三十一に、「欲界中の五識相応の樂、初禪中の三識（眼、耳、身の三識、鼻舌二識なし）相応の樂、三禪中の一切の樂、是を樂と名く。欲界及び初禪の意識相応の樂、二禪中の一切の樂、之を喜と名く。」とあるが如く、欲界は五官の外樂、色界は意識の内樂とは局られないのである。いづれにも外樂内樂を有するのである。しかるに今これを局るは如何。これ多勝の義によるのである、多勝の義とは、欲界にも、意識の喜受即ち内樂がありはしても、五識所生の樂の方が多くて勝れている。又、色界にも三識相応の外樂がありはしても、定所起の内樂が多勝であるが故に、その中に摂められるのである。欲界の喜受の如きは意識の樂ではあつても、もと外樂が多勝であり、これあつての内樂であるが故に、外樂へ摂められるのである。故に今、鸞師は、欲界の外

楽、色界の内楽と、内外楽を分別せられたのである。今この二楽は、三界虚妄顛倒の楽である。これを挙げて、界外の無漏の大楽に揀ばんとせられるのである。

一。次に法楽楽を釈して、「三者、法楽楽謂智慧所生楽」と云われる。法楽楽とは、

法——仏正法

楽——音楽

楽——安楽

故に法楽とは法譬並び言うて名とせられたのであり、これに楽を加えて、妙楽勝真心の何たるかを示されるのである。

法を音楽というは、孝経に「移風易俗莫善於楽」という句がある。風俗を悪より善に移し易うるものは、音楽より善きはないというのである。この意である。云く、四顛倒を易えて、涅槃の四徳を得るといふ。是れ果に約する説、これを因に約せば、信心歡喜を此楽となす。

今家に約せば、此楽、諸行往生の風を移して、念仏往生の俗となすが故に、法楽といふ。果に約せば、涅槃の証果、即ち彼土の益。此土彼土の両益俱に信心の智慧より起るが故に、「智慧所生の楽」と云われる。

又云く、無始已來の菩提相違の風俗を移して、順菩提の俗に易えるが故に法楽と名づける。この法楽によつて妙楽心を生ずるが故に、名づけて法楽楽といふ。この楽こそは、界外無漏の智慧より生ずるが故に智慧所生の楽と云われるのである。信心歡喜こそは、この仏智所生の法楽楽である。

4

一。「三法楽楽謂智慧所生楽。此智慧所生楽從愛仏功德起」

鸞師は、楽を分つて、外楽、内楽、法楽楽の三種とせられた。しかしして外楽はこれを欲界五識の楽、内楽はこれを色界意識の楽とし、この迷界の楽に棟んで挙げられたのが第三の法楽楽である。この法楽楽とは、いわゆる法喜楽、法味楽等とよばれるもので、無漏清浄なる楽である。後の妙楽勝真心がこれである。しかししてこの楽は、智慧より生ずるものであるが故に「謂智慧所生楽」と謂われるのである。法楽楽は、本願力回向の信心の智慧より生ずるのである。久遠劫來の菩提相違の風俗を移して、順菩提の俗に易えたまうところの如来利他の智慧によつて生じたる楽、無漏清浄なる智慧より生ずるのである。

然ればかかる智慧は何故に真実の楽を生ずるのであるか、智慧所生の楽は、転迷開悟の大用を具するのであるか、これに答えて、

「此智慧所生楽 從愛仏功德起」

と言われる。智慧は功德を愛する。功德によつて功德に向かつて開眼する。それが即ち智慧である。功德によつて生じたる智慧は、それ故に功德を愛する。ここに功德はその大用を發揮して、真実の大楽を行者の上に顕現するのである。内楽外楽は、妄想顛倒より生ずる無明煩惱の所生であり、法楽楽は、智慧、即ち功德を愛するより生ずるのである。功德とは、仏の大善大功德である。略一処、仏の功德に専念專注する

より起こるのである。略一処成就のみこと頂くべきである。この文正しく略一処の意を積したまうに過ぎず。

菩薩の徳もとより、通じて三業莊嚴を縁するより起こるものなるも、三種即ち一仏徳とするは、菩薩は、広略相入の境徳に達することを示すのである。

菩薩の真樂は、智慧より生ず、仏徳を愛樂する智慧より生ずること、誠に銘記すべきである。

一。本文。「是遠離我心遠離無安衆生心遠離自供養心是三種心清淨増進略為妙樂勝真心」

一。ここに挙げられたる、遠離我心貪着自身、遠離無安衆生心、遠離供養恭敬自身心の三種心は、障菩提門に於いて示されたるところの、菩薩離障の三心であった。即ち菩薩は、智慧門に依るが故に自樂を求めず、我心自身に貪著するを遠離し、次に慈悲門に依るが故に一切衆生の苦を抜かんが為に、無安衆生心を遠離し、方便門に依るが故に、一切衆生を憐愍するの心を以て、自身を供養し恭敬する心を遠離するのであった。これ正しく障菩提の三種心を遠離することを示されたものである。

しかるに今は、菩薩が正しく大法によつて涅槃の道を獲たる、妙樂勝真心を明かさるる処であるが故に、寧ろ、順菩提門の三心、即ち無染清淨心(智慧門)安清淨心(慈悲門)樂清淨心(方便門)を挙げらるべきではないか。しかるに順菩提門の三心を挙げずして、離障の三心を挙げられるは何故であろうか。これ離障は表裏一体であつて、離障のところを於いてのみ、順菩提があるが故に、又、論には既に、「この三種の心は(無染清淨心、安清淨心、樂清淨心の順菩提門の三心)略して一処に妙樂勝真心を成就したまへり」と説かれてあつて、重ねてこれを挙げなくても、妙樂心の内容として示されてあるのである。されば、今は離障の三種心を挙げて、捨離の方を示し、そこに自ら取るべき世界を明かさんとせられるのである。障碍となる三種心を遠離せずして、尊きものを成就せんとするは凡夫の通弊である。

一。「是の三種の心清淨に増進するを略して妙樂勝真心と為す」というは、清淨増進とは、清淨とは今の三心のことであり、増進とは妙樂勝真心のことである。略してとは、三種心は遂に三種心のままあるのではなくて、一の妙樂勝真心となるのである。離障の三心と順菩提の三心は、表裏一体に、菩薩の上にあつては、略して一処に妙樂勝真心となつて成就するのである。この心即ち先の智慧所生の樂であり、仏徳を愛するよりに起るところの法樂樂そのものである。

一。本文。「妙言其好。以此樂縁仏生故。勝言勝出三界中樂。真言不虛偽不顛倒。」

この文は、妙樂勝真心を積せられる。この樂の妙好なる所以は、仏徳を縁することによつて生ずるが故である。これ仏の第十八願、不虛作の仏徳に約するの積である。

勝とは、三界中の楽に勝出することを示すので、迷界一切の苦楽を超越せる大楽、これ浄土の清浄なる国徳に約しての積である。この心、浄土の清浄功德さながらの勝樂である。如来本願に生きるものは三界を勝出せるこの妙樂勝真心を獲るのである。

真言不虚偽不顛倒とは、不虚偽とは、不虚作功德、不顛倒とは清浄功德、この浄土三嚴二十九種中の総相によつて、二十九種莊嚴を統べ、広略不二の境智を示すのである。浄土無量の莊嚴も、これ如来清浄功德の略相におさまつて、唯一の自利真實功德相となり、又莊嚴不虚作の徳より見れば、大悲利他回向の願心莊嚴に外ならず。利他を全うしたる自利（真實功德）自利を全うしたる利他（願心莊嚴）。願心莊嚴の故に不虚偽、真實自利の功德相の故に不顛倒である。されば、妙樂勝真心は自ら二義を存す。即ち、願心莊嚴、不虚作の徳を縁じて生ずるより云わば、建章の我一心帰命の安心であり、清浄功德入一法句を縁じて生ずるより云わば、無相の真樂を得るの一心である。

されば六要鈔四に云く、

「妙樂勝真心は般若の樂なり。寂滅無為生死の患を滅するが故に樂と為す也。上の柔軟心は是れ自利究竟の広略不二心也。自利を全うじて利他を起こす。五六七章次に増進して終に今の一心を成ず。この一心自利利他不二なり。」

実に妙樂勝真心とは、智願回向の自利利他不二心である。これ正しく其の心相を語れば一心帰命である。善巧摂化章已下は、この一心帰命の安心の体徳を示されたのである。一心体具の徳を説けば、誠にかかる広大の徳ありと示されたる一心具徳門に外ならず。かかる不可思議広大の徳ある大菩提心なるが故に必ず菩提に至る。体徳を略一処に論ずれば、妙樂勝真心と言われる。一心帰命即ち今の妙樂勝真心、自利利他⁶一如、悲智不二の大菩提心、建章の一心帰命の徳相を示して妙樂勝真心と名づけられる。この心虚偽ならず、この心顛倒せず、三界に出過して虚妄を離る。因に就いて嘆ずれば法蔵菩薩の善巧摂化の徳、果に約して談ずれば盡十方無碍光如来そのままの一心。故に高祖「廣大無碍之一心」と讃嘆せらる。しかも衆生の機の方は、「心得やすの安心や、ゆきやすの浄土や」聞其名号信心歡喜、聞く一念に回向せられる易行他力の一心である。

一。一心の体徳に就いて。

以上によつて、我等は、帰命の一心が如何に広大なる徳を具足するかということについて知ることが出来た。帰命の一心とは、行者にあつては、其の名号を聞信して得るところの安心である。即ち第十八願の三信を全うしたる本願力回向の大信心である。それであるが故に、もしそれ、これを如来のお手元に於いて沙汰すれば、方便智の中に智慧門、慈悲門、方便門の三種門を成就して、この三種門によつて回向したまうもの即ち、帰命の一心である。されば衆生の機に於いて顕現せる一心帰命はそのまま、法体に約せば、智慧門慈悲門方便門の三種門なるが故に、この三種門こそは一心の体徳そのものである。この三種門の徳なくば、一心帰命は、真實なるものということは出来ないものである。

しかるに今、論に於いては、これを菩薩の法、即ち還相の菩薩の徳として示されたのである。如来浄土の眷属として永久に還相悲化する菩薩の徳を示されたものであ

る。しかるに還相菩薩の徳は、そのまま本仏の本願力の徳なるが故に、これを法蔵菩薩の徳として見たまうのが我が聖人であった。ここに於いて、この三種門は、本仏の本願名号に内在する徳であると共に、行者の一心帰命の体徳であり、やがて、還相の菩薩の發揮する徳であった。かくの如く、生仏不二の徳を語る世界をこそ第十八願の世界というのであった。かつて「柔軟心」の題下に善巧撰化章已下を講じた時「菩薩」なる文字は、願生行者とも、還相の菩薩とも、法蔵菩薩ともとることが出来ると言ったのは、これがためである。一心の行者が、如来の回向によつて獲得するものは、如来の全功德である。往還二種回向は名号の中に撰在して一念に回向されるが故に、その行者に於ける相発には、自ら因果の次第あるも、一念の信に於いて欠ぐるところはないのである。これ一心即五念門の法門の説かれる所以である。自利利他の自利を語るもの往相なれば、自利利他の利他を示すもの還相である。まことに行者發起の一心を、廣大無碍之一心と云われ、廣大難思之慶心と云われるものは、この一心のうち、智慧門慈悲門方便門の徳あつて、限りなく撰取し善巧回向したまうが故である。されば、道綽は安樂集に、信心の徳用を嘆じて、

「菩提(信心のこと)とは、乃ち是れ無上仏道之名なり。もし発心作仏せんと欲わば、この心広大にして法界に周徧し、この心長遠にして未来際を盡し、この心普く備さに二乗の障を離る。もし能く一たび発心すれば無始生死の有輪を傾く。」
と仰せられた。一心の体徳思ふべきである。

一。名義撰対について。

標章の「名義撰対」ということについて、最初に語つたように、名義撰対ということとは、能詮の名(あらわしてであるところの名)としよせん義(あらわされて、即ち名によつて謂いあらわされる義)とを相対比して、一つの義の中に多くの名を撰めるといふことである。即ち、

「向に智慧慈悲方便三種門は、般若を撰取す。般若は方便を撰取す、と説きつ。知る心しとのたまえり。」

この論の文に於いて、般若の智慧(根本智、又は実智)と方便智(後得智、又は権智)との二心(義)が、各、智慧、慈悲、方便の名と撰対することを示されたものである。即ち、方便智によつて衆生は助けられるのであるが、その方便智は、智慧慈悲方便の三種門の名を撰めて初めてその義が詮われるのである。その方便智は、しかしながら、般若の根本智なくしては生まれえないし、般若は方便智となつてはじめて般若を全うするのである。故に「三種門は般若を撰取す 般若は方便を撰取す」と云われるのである。般若の平等智なくしては、方便の権智なく、方便の権智なくしては、般若の根本智の多用は顯われない。互いに能撰となり、所撰となること知るべきである。故に、巧方便の具体相たる三種門を般若が撰取し、三種門の方便智は般若を撰取すること知るべきである。

六要鈔には、この初段のみによつて名義撰対章と名づけられたものとせられる。

しかるに大派の香醉師は、上に挙げた九種の法門と、そのしよせんの義たる四心(般若、方便、無障心、妙樂勝真心)との相撰を明かすとの説を樹てられた。この説によれば名義撰対の標目は、本章三段全体にわたって立てられたとするのである。即ち、

智慧門

般若

第一段障菩提門

三種門の名 義

方便門

方便

第二段障菩提門

遠離我心貪着自身

三法の名 義||無障心

遠離無安衆生心

無染清浄心

第三段順菩提門

三心の名 義||妙樂勝真心

安清浄心

以上の如く、この第二説は、全章にわたつての文の義理を明かにするに便なるが故に、この説を用いられる。

第二段の文に於いては、智慧門によるが故に、我心貪着自身を遠離し、慈悲門によるが故に、無安衆生心を遠離し、方便門によるが故に、供養恭敬自身心を遠離する。この三法の名は、無障心と互いに撰対する。この三法は無障心を撰取するし、無障心8はこの三法を撰取するこれ名義撰対である。

第三段の文は、無染清浄心、安清浄心、樂清浄心の三心は、妙樂勝真心と互いに撰対することを示されたものである。

かくして、九法、四心の法門は、互いに撰取しつつ、遂に略一処に、妙樂勝真心を成就するのであった。妙樂勝真心とは一心帰命の安心である。まことに行者にあつては但、信心決定して念仏するところの易行の一道なれども、裏をかえせば、そこにはその体徳として、九法四心の大法門は具足されているのである。智慧慈悲方便の三種門は、やがて九法四心の法門と展開せられて、妙樂勝真心を成就するのであった。ここに於いて、善巧撰化章、障菩提門章、順菩提門章、名義撰対章にわたつて説かれたる法門は、この妙樂勝真の一心に既結するのであった。妙樂心は帰命の一心に外ならず、一心帰命の大信の廣大知るべきである。名義撰対章を了る。